

奈良高専 図書館だより

目次

1. 読書感想文コンクール
総評と作品
2. 映像100選決定
3. '92読書週間について

1993年3月 奈良工業高等専門学校図書館 発行

平成4年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会
国語科

恒例の行事である夏休み読書感想文コンクールも、今回で17回目となった。今年も多数の学生諸君の応募があったが、図書委員会と国語科教官との共同選考の結果、下記の10名の諸君の作品が入選作となった。ここにその栄誉を称えたい。

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 S 四之宮基貴 海の図 | 1 S 徳永 智信 愛、深き淵より |
| 1 E 武田 真貴 銀河鉄道の夜 | 1 E 谷口 光 差別用語の基礎知識 |
| 1 C 松下すみれ 変身 | 2 M 谷口 充孝 いまを生きる |
| 2 I 西本 祐子 TREE | 3 E 原田 寛之 海を見ていたジョニー |
| 3 E 森本 聡 車輪の下 | 3 C 神谷香奈江 ピアニシモ |

また、惜しくも入選作とはならなかったが、最終選考にまで残った諸君の作品は次のとおりである。これらの諸君にも、入選となった諸君に劣らない称賛の語を贈りたい。

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 M 寺川あづみ 銀河鉄道の夜 | 1 M 名古 朋子 黒パン俘虜記 |
| 1 I 八段 清和 羅生門 | 1 I 山田 純司 変身 |
| 1 C 濱本 直樹 手掘り日本史 | 2 M 森本 一令 ヘンリー・フォード |
| 2 S 西口 誠二 鈴の鳴る道 | 2 S 土肥 伸行 雨の日はいつもレイン |
| 2 E 住友 俊也 わが友 本田宗一郎 | 2 E 福井 良 戦争と沖縄 |
| 2 I 森岡 剛 外人はつらいよ | 2 C 寺崎 実子 おろしや国酔夢譚 |
| 2 C 村井 久子 だれも知らない | 3 S 小林 恭子 火垂るの墓 |
| 3 I 植田恵美子 銀河鉄道の夜 | 3 C 泉 真由美 若きウェルテルの悩み |
| 4 C 安藤 毅 羅生門 | |

世間では、よく若者の活字離れとか文章能力の低下を憂う声がしきりである。奈良高専の諸君にも決してそのような傾向が見えない訳ではないが、少なくとも最終選考に残った諸君の文章を読む限り、多少稚拙な表現に出会うことはあっても、事態はそう深刻ではないような気もして、国語の教官としてはほっとする思いがした。何よりも好感が持てるのは、作品に正面から取り組み、著者の提示する問題を、同時に自分の課題として真剣に考えようとする態度のうかがえる文章が数多かったことである。

読書感想文というものは、ある面では難しく面倒なものである。私も高校時代、本を読むことは好きであったが、読書感想文の課題が課せられると嫌な思いがしたものである。教師の立場になって、それでもなお諸君に読書感想文を求めるのは、やはり学生諸君各人の水準において、それが有意義なことであると考えるからである。読書が好きで、今までに比較的読書経験のある諸君には、私としては特に言うことはない。今までに読んで感動を覚えた本、問題を痛感させられた本、読みたかったが機会がなかった本は幾らでもあるだろう。それを読んだ感想を書けばよい。感想文にするのは面倒だが、それは著者の考えをより深い水準で理解し、自分の考えをより深める一助となっているはずである。逆に、今まで余り読書の経験を積んでいない諸君には、まずこの機会に読書の楽しさを知ってもらいたいと思う。そのような諸君には、何でもいから、音楽の好きな人なら音楽、野球の好きな人なら野球と、とにかく自分の興味のある分野の本を選べばよいだろう。そして、感想文は、内容報告ぐらいのつもりで、気楽に書けばよいと思う。余りに感想文を意識すると、楽しみであるはずの読書がかえって苦行になってしまふだろう。

恐らく、来年度もどのような形になるかは分からないが、この読書感想文コンクールは行われるはずである。諸君の新たなチャレンジを期待する。
(国語科・勢田)

入 選 作 品 紹 介

「海の図」を読んで

(灰谷健次郎著 理論社)

1 S 四之宮 基 貴

「海」は広い。しかし私達はその一部しか見ることはない。日本でみている海と、幾万キロも離れたところで誰かが見ている海とが繋がっていると思うと心まで広がっていくような気がする。『海図』は、広く美しい海も、そして海を汚す醜い争いも描いていた。

元漁師の子壮吉は、ほとんど毎日五歳の女の子陽子と日没を見に行く。壮吉は「お日ィさんはな、おやすみなさいって、そのつぎ顔を見せるとき、いつも、さらっぴんなんやぞ」と、陽子に話しかける。そして「人間はみんなお日ィさんのように毎日さらっぴんにならんとあかんのやぞ」とも言う。毎日そんなことができるのなら、その人はどんなに完璧な人になるだろう。過去を捨て切れず、自分を捨てきれないから、人は私利私欲にはしり、美しい海も心も汚していく。しかし壮吉や、陽子の姉の秀世らは、少しづつだが懸命に「さらっぴん」になろうとする。壮吉は父親のした仕事の深い意味を探り、秀世は妊娠したという過去の罪に苦しみ、陽子は自分のいられない大人の世界へはうり込まれ、幼いなりに苦しんでいる。しかし、苦しさで自分を洗って「さらっぴん」になってい

く。私はその勇気も気力も彼らの何十分の一だ。彼らに比べたら、私はなんと小さく恥ずかしい人間なのだろう、と思わずにはいられなかった。

話に出てくる島の人々は、いったいに純粋に生きている。しかし「密漁」の話だって出てくる。島での漁が消えていくのもいやだけど、漁師の心が墮落していくことのほうがずっと怖い、というようなことを漁師の息子が言う。今や第一次産業は、働き手の腕ではなく、都会の人々が握っている。「日本の農家だけが、不当に低く評価されている」と農産物の低さに怒る農家が言うが、そういう、本当の人間らしい心をもった生産者がせいこいことや非人間的なことに手を染めると、邪な心をおさえ純粋にひたむきに生きていける人は、ずっと減ってしまうんじゃないかと思う。

壮吉は父親の使っていた百葉箱を見つけたとき思わず肩を震わせて泣く。また、島の貴重な自然を残すためにした父の仕事の意味を知って、恋した秀世を抱いて声を震わせる。私は、今までに後で泣けるような、そんな素晴らしい事をしたことがない。何事でも一生懸命する姿は美しいというのが、壮吉が泣いたとき、私には彼の涙は黄金に見えた。私達もこんなに輝けるようなことをしないと、これから進む社会は、泥のようになっていくと思う。

壮吉は「有るものを守っているだけの人って魅力を感じない」と陽子の母に言う。しかし小母さんに「有るものを守ることの方が、より勇気がい

る場合だってあるのよ」といわれる。今、大人たちや私達若者さえが「有るものを守る」というか、有るものに流されるといった感じがある。その殻を破るのは容易ではないし、一人がやる気でいても誰もついてこない、という絶望感もある。だから、登校拒否が増え続けているのだとも思う。しかし、私にはしたくても何も出来ない。だから、壮吉は私よりもずっと素晴らしい人だと思う。しかし、心では、昔の人や、今でも伝統を守っている人は素晴らしいと思うし、守っていくのは勇気があることだと理解できる。

物語を読む間、私は身近に「壮吉」を探していた。すぐ近くにいそうだが、日本の都市圏や学歴社会に関わっている人にはないものを壮吉は持っている。壮吉は私の理想の人間だ。私は、今の人の心の荒廃した社会でも壮吉に負けない生き方をしたい。色々な意味での勇気や、みなぎる活力をもって、残り長くも短くもある人生を生きたい。たとえ「死ぬときゃ独りでババだらけ」になっても……。

「愛、深き淵より」を読んで

(星野富弘著 立風書房)

1 S 徳 永 智 信

僕とこの本との出逢いは、中学三年生の時だった。国語の授業で、けがで全身が麻痺し、口で筆をとり、詩を書く人の話を聞かされた。それが、この本の著者、星野富弘さんであった。

星野さんは、体育の教師で、部活の指導中に誤って首から転落して、首から下の自由を失った人である。その九年間にわたる闘病生活と人とのふれ合いが綴ってあった。

星野さんは、活発で明るく、運動がとても大好きな人だった。そんな星野さんは、好きな事が原因でけがをして一瞬にして自由を失ってしまわれた。これ以上皮肉でくやしいことはないだろう。そのくやしさを体で表そうにも、体は動いてくれない。つい、さっきまでは当り前のように手も足も動いたのだから、そのくやしさといたら並ではなかったらと思う。

星野さんのやり場のない、たまりにたまっていたらだちは、ある日徹夜で看病しているお母さんに向けられた。食事を口まで運んでもらうのに、お

母さんの手が震え、こぼれてしまったのが原因だ。そんな些細な事で……と思い、一時、星野さんの人柄を疑ってしまったが、後で思いなおした。この怒りはお母さんの失敗に対してではなく、どうしようもない星野さんの運命に対してだ。

しかし、お母さんにしてみたら、相当なショックだったろうと思う。必死で看病しているのに、ことごとく打ちのめされ、もう看病もできないはずがないであろう。僕なら絶対にできない。しかし、お母さんはそれでも黙って看病を続けた。それはお母さんの強い心がそうさせたのだらうと思う。僕はそんなお母さんの心とけなげさに、痛く胸がしめつけられ、また、尊敬せざるを得なかった。しかし、星野さん自身も苦しかったのだらうと思う。人間とは哀しい生き物だとつくづく思った。

そういった星野さんのすさんだ心も、同じ病室の人達や看護婦・医師達とのふれ合の中で、少しずつ、晴れていった。しかし、その心にも、かげりが見えることもあった。

同室の患者のター坊という中学生と仲良くなった星野さんは、必死で彼の回復を祈ったのに、やがて元気になった彼に、嫉妬をしてしまうのだった。星野さんは、一生懸命の回復を喜ぼうとして、こう思った。自分は少しも変わらないのに、周囲の人が不幸になると自分は幸福だと思い、他人が幸福になれば自分が不幸になってしまう。

僕は、星野さんという人は、どうしてこんなに自分を客観的に見ることができると不思議に思い、あこがれた。自分を見つめる力は、やはり逆境に立たされてこそ身につくものなのかと考えさせられた。

星野さんはその後、口でペンをくわえ、絵を描き、詩を書くことができるようになった。並々ならぬ努力の結晶に、星野さんは希望を持ち、日々を大切に送っている。それに比べ僕達は、ろくに努力もしないで、怠けることばかり考えてしまう。僕はこの本を通して、星野さんの生き様を知るばかりでなく、詩人であり、哲学者であり画家である一人の障害者に、人間というものを考えるきっかけを与えてもらった。また、星野さんのお母さんに、母の偉大さと愛を見ることができた。

星野さんは、あとがきの最後にこう記し、感動の連続だった僕の心に安らぎを残してくれた。

『深き淵より、私はまた一步前に進めそうです。』

「銀河鉄道の夜」を読んで

(宮澤賢治著)

— 1 E 武田真希 —

四・五年前、そう私が小学五・六年生の頃、その頃私は本が好きで好きで、毎日のように学校の図書室に通っていました。

その頃、私が読んでいた本で、はっきりと記憶に残っているうちの 하나가、この宮澤賢治の未完成作品である『銀河鉄道の夜』です。

この作品で感想文を書くのは実は三度目で、小学校六年生の時、中学二年生の時、そして高専一年生、現在です。

その時書いた感想文の結びの言葉は、小学生の時に「私は、カムパネルラが、帰ってくると思います。」で、そして、中学生の時は「私は宮澤賢治はよく理解できません。」であったことを覚えています。

同じ作品で、それも同一人物が感想文を書いたのに、時間を隔てたことによって全く感じ方が変わってくる。心の成長と共に作品に感じる視点が変わってくる。その時の感情によってもガラッと変わる視点。この視点と共に私自身の銀河鉄道の夜を語ってみることにします。

「僕の少年という心が、銀河鉄道を呼ぶ」—これは、私が最近書きあげた、この作品を原作とした戯曲のジョバンニの最後のセリフです。

私は今、この作品を世間という哀しく恐ろしい怪物に脅かされ、少年の心、冒険心や非現実的な世界を持つ心を失わされていく二人の少年、ジョバンニとカムパネルラの底しれぬ哀愁の物語、という視点でみつめています。

銀河鉄道は、死人を乗せて走る列車だったために、ジョバンニは元の世界に戻ってきた。私は、この解釈のある雑誌で読んだ時、実に不満が残りました。

解釈の仕方は、それぞれ個人の自由だと思うが、こんな単純に簡潔には、私は解釈したくない。

私は、私の戯曲、『永遠なる銀河鉄道』で、カムパネルラは、世間に『死』という手段を使い、自分の少年の心を守り銀河鉄道と終わらぬ旅に出る、しかしジョバンニは世間から逃げるなど、少しも思っていなかった。現実というものに世間に

戻されてしまう。友情、別れ、カムパネルラの本当の場所を知っていながら言えなかった。ジョバンニを閉じこめた世間の卑劣さ、そんな現在に生きる不安感を一気に吸いこんだブラックホールが大爆発を起こした。という想いで文章を描きました。

私はこの作品を宮澤賢治と同じ視点でみつめようなどとは、決して想いません。同じ視点でみるより、宮澤賢治が思いもよらなかった視点で、この作品を味わいたい。そう思うのは、私だけでしょうか？

私は高専に入ってからこの作品を何十回となく読みました。この話を私の戯曲で今度芝居をする役者仲間にしたところ、

「そんなに、同じ話を何回も読んで退屈しないか？」と聞かれたことがあります。その質問に私は、「何回読んでも、全く別な話を読んでいる気持ちになるから、退屈だなんて思ったことがない。」と答えました。一同、不思議そうな顔で私を見ていました。でも、この戯曲で芝居をすることによって、きっと今の私の気持ちも分かってもらえると思います。

この作品が未完成であるのと同時に私の視点も未完成のまま、銀河鉄道と共に永遠に走り続けていくのです。

「私は一生銀河鉄道の夜を読み続けるだろう。」

「差別用語の基礎知識」を読んで

(高木正幸編 土曜美術社)

— 1 E 谷口光 —

現代社会、特に日本では差別表現等が問題になっている。テレビ等のマスメディアでは、ふと飛び出した差別的表現が非難の対象となることも少なくない。最近の例では、政界のトップクラスがアメリカ人に対して差別表現を用い、ひどく批判された。この問題は、最近大きな問題になっている。「ジャパンパッシング」にも大きな影響を及ぼした。

前例からもわかるとおり、これらは政治的、外交的な面にも大きな影響力をもつ。「失言→批判→謝罪」だけで済む問題ではなく、その下に流れる意識的なものが問題なのだ。

マスコミの中では、そういった意識的な面の事

を考えずに、言い換えや「不適切な表現」云々の逃げとも見られるような行為が定着してしまっている。

差別的な考えをとまわなくても、誤解をまねく表現というものが存在し、批判の対象となることも多い。

「正直者はバカをみる」という言葉があるが、この文からは差別的な意志はなんら感じられない。だが、「バカ」という言葉は一般的に言う差別用語であり、誤解をまねきやすい表現なのだ。

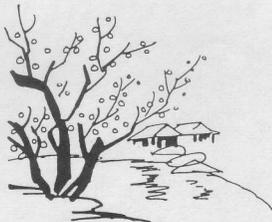
もっとも差別用語を使わなくても差別的表現というものが存在する。「彼は片親だから……」と言う文の中に差別用言はみられないが、根底には何か差別的なものを含んでいる。

これらの例を総合的に考えると、言い換えればいいとかいう問題ではないことがはっきりとわかるのである。

障害者差別問題について考えてみよう。たしかに健常者と全く同じ活動が可能ではない。だが、だからといって入学拒否や面接などの手段を取らずに門前払いといった事をするのは非常におかしなことである。これらの行為の底には「社会的弱者」に対する差別的なものがしっかりと感じとれる。

口をついて出る差別的な表現。これらを押さえつけて口に出さないということだけではなく、意識改革から出発していかなければならないと考えることができる。

今や一国の一個人の発言は、国内だけではなく、とおく離れた国の中でさえ聞くことができる。ちょっとした発言が大きな影響を及ぼすようになったこの現代だからこそ、もう一度差別という意識的な病気を見直し、治療すべきではないだろうか。女性が男性と同じように社会で活躍するようになったのと同じように、障害者などの被差別者が真に平等に社会で活躍できるシーンをつくっていくのはまぎれもなく私達なのである。この病気が完治するとき、本当の豊かな社会とよべるものが完成するのではないだろうか。



「変身」を読んで

—カフカさんと私—

1 C 松下すみれ

—只今より、作家のフランツ・カフカさんに突撃インタビューを行いたいと思います。カフカさん、よろしくお願ひします。

「こちらこそ。」

—突然ですが、貴方はこの作品を『失敗作である』とおっしゃったようですが、それはまたどうしてですか？

「とても読めたものではない結末、ほとんど細部にいたるまで不完全な作品だ。キミもそう思わないか？」

—いえいえ、とんでもない。これほどまでに私を引きつけた作品は、この“変身”が初めてですよ。素晴らしいと思います。

「どこが素晴らしいのだっ!!」

—どこもかもですよ。特におもしろいと思ったのは、この作品には不思議が多いこと、それから、妙に冷静に、即物的に書かれていることです。他のみなさんも同じことを思っているはずですよ。

「……………」

—不思議なことは無数にあります。まず、人間が一匹の巨大な虫に変身するというのは一体…。

「“変身”は、恐ろしい表象だよ。」

—空想が大きく広がったということですね。では、変身した経緯を表記していらっしやらないのは、何故ですか？

「必要ないからさ。主人公のザムザにも謎なのだから。」

—そうですか。それでは次に、ザムザの変身を周囲の人々が誰も不審に思わないというのも不思議だと思ひのですが。

「それは簡単だよ。この“変身”という作品の中の世界では、当然のことながら有りうる事実なのだ。」

—私どものような凡人には、到底、理解し難い世界ですね。

「いや、そうでもないさ。現に、そういう世界がどこかに存在しているかもしれないしね。」

—そんなもんですかね。

「ま、あまり深く追求とすぎると、かえって、良

くないよ。」

—そうですね。ところで、話が変わりますが、貴方のカフカという名前と、主人公のザムザというのは、何か関係があるのですか？ザムザはカフカさん自身の姿なのでしょうか？

「“変身”は決して告白ではない。しかし、ある意味では、秘密漏洩ではあるが。」

—否定も肯定もしないカフカさん。さすが大物ですね。さて、いよいよ最後の質問をいたします。ズバリ、自分で気に入らなかったこの作品がこれほどまでに有名になった感想は？

「んー、難しい質問だね。有名になるのはうれしいが、自分の心の中では納得できていない状態だ。みなさんと私は根本的に感受性が異なるのかもしれないな。」

—そうですね。数々の質問に答えていただき、ありがとうございました。みなさん、“変身”について、理解を深めることができましたでしょうか？

実を言うと、この私、まだ殆ど分かっておりません。ですので、これから、二度三度……いや、納得のいくまで読み重ねてゆきたいと思っておりますので、応援願います。では、みなさん、もう一度拍手を……。 (パチパチパチパチ)

「いまを生きる」を読んで

(クラインバウム著 新潮文庫)

— 2 M 谷 口 充 孝 —

「いまを生きる」とは、実に単純なことだが、この一言に何か奥深くて、それでいて何か新鮮なものが僕の心の中にある。この作品を読んでいると共感させられる部分がたくさんあって、胸がおどるようだった。この物語の舞台は、一九五九年のアメリカ東部の名門校である。エリートの子供たちが集まり、やがてはハーヴァドやイェールといったアイヴィー・リーグの名門大学に進学していくといったようないいとこの坊ちゃんが多くて、この話に登場する生徒たちは、みんな大人しく、やさしすぎる少年ばかりである。しかも時代は一九五九年で、教師や父親などが絶対的な存在であったので、若者たちが自分たちの主張を堂々ということが難しかった時代であった。そういう状況のなかで少年たちは、他の教師たちとは違った考えを持つ国語の教師ジョン・キーティングに出会う。

そして生徒たちは、はじめて積極的に自分自身の考えを尊重し、自分の言葉でそれを表現することができる素晴らしさに目覚めていくのである。

僕は、このジョン・キーティング先生がすごく好きだ。自分の理想や夢を強く信じているからだ。そして、僕も大人になるんだったら、こういう大人になりたいと思う。常に自分の考えを持っていて、教科書に載っている詩の序文の、詩の偉大さをグラフにとって計測すると詩の価値がわかるだろう、というようなことが書かれてた部分を生徒に破って捨てさせるという場面がある。詩をはかりにかけて他と比べて、ただ単に詩を理論的に勉強させるのではなく、詩を読んでみて、自然なままに感じるということが重要なのであるということを生徒たちに教える。この自然に何かを感じるとは、とっても大事なことだと思う。これは、人間の最も自然な姿であって、理論的に物事を考えてばかりいると本当の自分を見失ってしまう危険性が出てくる。自然のままに物事を感じるということは、即ち自分に素直になり、自分なりの考えを持つということである。キーティング先生が主張したいのは、まさにそこなのである。それがこの話の中に出てくる。“カルペ・ディエム”、“きょうを楽しめ”につながっていくのだと思う。そして、少年たちは、だんだん「自由」に近づいていくのだが、生徒たちを規則で縛りつけた管理教育という環境のなかでは、「自由」は、少年たちをときに不幸にしてゆく。芝居に生きがいを見出したニール・ペリーは常に厳格な父親の影におびえ、自分の芝居にかける情熱を話せないでいた。この父親は、息子の本当の気持ちを知ろうともせず、息子がなにかにとりつかれていたらとしても、それは一時の気まぐれではしかみたくないものだ勝手に解釈して、息子の気持ちなど全く理解しようとはしなかった。常に自分の思いのままの人生を息子に送らせようとしていた。そうさせることが息子のニールにとっても一番よいことであると思い込んでいたので、息子に絶大なる期待をもっていた。ニールにしてみればそれは、あまりにも残酷すぎるものだった。こうして、「自由」を父親にあっけなく踏みこじられたニールは、どうしようもない絶望感に打ちのめされて、自らの手で命を断ってしまったのである。こんなエリートの息子を持った父親が、このような気持ちになるのはわかる気もするが、これは絶対に間違った考えであり、例

え親であっても、息子の気持ちを踏みにじる権利は、絶対ない。実に愚かなことである。本当に息子のために思うのなら、息子の気持ちをよく理解し、個人の考えを尊重するべきではないだろうか。ニールの人生は、父親の思うままの人生であり、彼は自分に正直な人生を送ることができずに死を選んでしまった。僕は、改めて、“カルペ・ディエム”「きょうを楽しめ」を提唱したい。

「TREE」を読んで

(C.W.ニコル著 徳間文庫)

2 I 西本祐子

私はこの本がとても気に入った。著者はC・W・ニコルさんである。この本は題のとおり木のことを主として書かれている。自然破壊などのことについて書かれているのだ。私も最近、テレビなどで環境破壊に関するニュースなどをよく目にするため、自分では自然について、知っているつもりだった。しかし、本を読んで自分が全く無知であったことに気づいた。何も知らないことについて考えたりするのはまず無理なことである。他にもこの本は私にいろいろなことを教えてくれた。

本の中に、木という言葉や木の名前、自然を指す言葉がたくさん出てきた。それらの活字を見、読んでいて思った。それらの言葉がとても暖かいような、心が落ち着くような気持ちを人に与えるのだなあと思った。大木の生えた森に行きたいと思った。この本の文章はとても分かりやすく、情景が目浮かぶようだった。著者は大きな古い木が好きようだ。著者は自分の見た素晴らしい大木、古木の様子を書いていた。私もそれを実際に見てみたいと思った。森林破壊の事を軽く考えている人や、好き勝手に何も考えず木を切っている企業の人達が大きくて素晴らしい木を見たならば、もう少し考えが変わるのではないかと思う。

私達が本当に自然を守っていくためには、たくさんの事実を知り、もっと自然について知らなければならないと思った。現に、私は何も知ってはいなかったし、私のような人が結構いると思う。著者はこんなことも書いていた。クジラを捕ることを禁止しようと主張する人々のことを、狂信的なグリーンピースの連中らとか過激論者と表現し、彼らの保護しようとしているのは自然ではないと

書いている。そして、唯一、本当の意味で自然保護を行っているのは、狩人だと書いていた。どうしてだろうと私は思った。自然というものは木一本、葉にしても重く関係のあるものだという事などを知るうちに、自然を一番知っているのは共に生活する狩人達だったと理解できた。知っているから、自然に頼って生きているから、これ位の動物は捕ってもいいと分かるのだろう。そして、そのおかげで生態系が乱れずにいるのだろう。

私は今まで、人間が自然の中では不必要なものではないのかと極端なことを考えたこともあった。でも、一部の狩人のように自然と共に生きる人もいるのだと思った。私は、今の工業の発達した社会を潰すこともないと思う。でも自然はこれ以上破壊してはいけないと思う。何をすればいいのかは分からないけれど、とりあえず私はもっと自然についての知識を増やさなければと思う。手遅れになる前に、世界の人達は自分の事を考えるならば、地球の事を考え、何らかの行動を起こさなければならぬと思う。

「海を見ていたジョニー」を読んで

(五木寛之著 新潮文庫)

3 E 原田寛之

僕は高専に入るまで、ずっとピアノを習っていました。僕が寮に入るので、もう先生に習うのは今日が最後というときに、先生が、「ピアノのテクニックは少しは教えたけれど、ピアノは指だけでは弾くことはできない。」といて、この本を渡してくれたのです。

主人公は、黒人のピアニストです。彼は、よい人間にしか他人が感動するようないい演奏はできないと考えていました。そんな彼がベトナム戦争に行き、そして帰ってきた時、自分は戦争で汚い人間になってしまったので、もう以前のようにピアノを弾くことはできないと思い込んでしまいました。

しかし、仲間いせがまれて彼が弾いたピアノは、以前の演奏よりずっと深い感動を与える素晴らしいものでした。そんなはずはないと彼は叫びます。そして彼は自分の考えがまちがっていたと悟り、唯一信じていた音楽さえも信じられなくなってしまいます。音楽は戦争で傷ついた彼に残された一

つの支えだったのに、それさえも失ってしまったのです。絶望した彼はピアノを銃で撃ったあと、海を見ながらその銃で自分の命を絶ってしまいました。

たしかに、音楽は人の心をそのまま奏でます。僕は、楽しい曲は楽しいときに、悲しい曲は悲しいときに、ラブ・ソングは恋をして弾かないと、その曲の良さは伝わらないと思います。どんなに指が動いても、自分が駄目な人間だと思っているは、だれも感動させることはできないはずでした。

しかし、彼が素晴らしい演奏をしたとき、彼の心の中は、自分は汚い駄目な人間なんだという思いであふれていました。彼の手は、戦場でたくさんの人を殺したのに、なぜその演奏は仲間の胸を打つ感動的なものになったのでしょうか。その答のヒントは、彼自身の言葉の中にあると思います。ブルースについて彼はこう語ります。

「悲しい歌が、ブルースだと思っている奴がいる。だが、それは違うな。ブルースって音楽は、二つの正反対の感情が同時に高まってくる、そんな具合のものさ。絶望的でありながら、同時に希望を感じさせるもの、淋しくせに明るいもの、悲しくせに陽気なもの……、それがブルースなんだ。」

一体この演奏には、どんな正反対の感情が含まれていたのでしょうか。それは、戦場で人を殺した自分は駄目な汚れた人間になってしまったんだという悲しみと、それは自分が生きるためには仕方がなかったんだという、自分のしたことを否定する心と肯定する心とがぶつかりあって、ブルースのメロディをより美しいものにしたように思えます。

しかし、彼はそれを認めませんでした。もしかすると彼は、なぜ仲間が感動したのかに気付いていたのかもしれませんが。いわば、あの演奏は、忌まわしい戦争が作り出したものです。その演奏が、彼が今まで弾いた中でいちばん素晴らしかったのなら、それは彼が戦場でしたことを、戦争そのものを肯定することになるのではないか、そう彼は考えたのではないのでしょうか。そして、それに我慢できなかった彼は、自らの命を絶ってまで戦争を否定したように思えてなりません。それは、彼が体験してきた戦場が、また戦争そのものが、どんなに悲惨なものかを伝えています。

この本を読み終えて、僕は先生に、ピアノを弾

くうえで一番大切なことを教ったような気がします。また、先生のお父さんは戦争で亡くなったんだと聞いたことがあります、戦争の悲惨さも先生は僕に伝えたかったに違いありません。

「車輪の下に」を読んで

(ヘルマン・ヘッセ著 角川文庫)

3 E 森 本 聡

以前、興味をひく「ある一冊の本」を読んだ。残念なことに書名を忘れてしまった。

ストーリーの一場面の舞台が西洋の町だった。地道のくぼみに大きな荷車が落ちた。その車輪に子供が下敷きになったのを、町長が荷車を持ち上げ助けたのである。この本の全ストーリーが知りたくて、結局『車輪の下に』という書名だけで買ったのが、この本だ。しかし、内容は全く違っていた。

物語の主人公は、ハンスという十五歳の少年だった。州試験、つまり高校受験を二、三週間後にひかえた彼の日常生活から話は展開された。少年は、誰もが認める優秀かつ非凡な人間だった。僕自身、読み進んでいく中で、受験勉強に必死になる姿には共感を覚える面もあった。試験前の「もし落ちたらどうしよう」という不安、試験後の「しくじった」という失望にもうなずけた。反面、これほど勉強ができるものかと驚いた。彼は優秀すぎたため、これらの不安、失望は全て周りの大人達には理解されなかった。理解されずに一人で悩む彼が、とてもかわいそうだった。僕だったらとても耐えきれない。そこがある意味で彼の強さだったのかもしれない。

州試験に合格直後の彼が、少年時代の中で最も輝いていた。太陽の下での魚釣り、水浴、そして木陰での昼寝。これら全てが少年だけの特権であり、内心うらやましかった。考えるだけでもすばらしかった。

その一時もつかの間、彼は初級神学校へ入学した。そこで彼の人生を変える原因となった、ハイルナーと知り合う。ハンスとハイルナーは深い友情で結ばれ、他の者達から孤立した。その後、ハンスの成績は徐々に下がっていった。教師は、ハイルナーが彼に悪影響を与えているとして、彼から離れるようハンスに告げた。しかし彼は離れな

かった。ハンスの「君を避け廻るくらいなら、むしろびりになりたいくらいだ。」という強い決意に、僕は改めて友情という結び付きの堅さを感じた。僕は、この少年のとった毅然とした態度が印象に残った。「人生の友」とか聞かすが、ハンスにとってハイルナーが、ハイルナーにとってハンスが、まさにそれであっただろう。

後にハイルナーは退校するのだが、それからの少年の生活は見るに耐えない。

校長のした助言に「弱っちゃいけないよ。そうでないと、車輪の下じきになるからね」というのがある。これはハンスの成績低下時にしたものだ。やっと分かった。『車輪』とは、この神学校の行き届き過ぎた「管理教育」そのものだったのだ。少年達の「友情」をも押しつぶしそうとするものだったのだ。『車輪』は、少年達だけで取り除くのは容易ではない。しかし、少年達が大人になっても、いつまでも「少年の輝き」を忘れなければ、「車輪自体」を作り出すことはないだろう。そして、たとえハンスのようにエリートコースから外れたとしても、一本の敷かれたレールの上を、順調に走る（生きる）より、レールから脱線しても自分の進むべき道にレールを敷き、自分自身を一つの「車輪」として走る方がどんなにすばらしいことだろうか。この時こそ、本当の人生の意味を理解し、『車輪』が輝く時だ。

「ピアニシモ」を読んで

(辻 仁成著 集英社文庫)

3 C 神谷 香奈江

この物語は、都会の孤独の中で転校をくり返し、誰とも心をかよわせることが出来なくなった中学生トオルと、彼が生み出した、彼にしか見えない人格ヒカルとの心の成長を描いたものです。

トオルの父親は、仕事一筋の銀行マンで、家にいることも少なく、転勤をくり返し、母親は時折「母親」であることの本能を忘れ、新興宗教にのめり込み、トオルは自らを「転校ジプシー」と名のり、行く先々の学校でいじめに合い、どんどん自分の殻をかたくしていきます。そして、極端に自分が父や母のように「大人」になるのを恐れ、自分の体が成長していくにつれて、ヒカルの声が聞きとりにくくなっていくのにおびえ、クラス

の生徒の目を気にし、つねに後ろを向いて生きています。

トオルは、今の世の中には、よく見られるタイプの少年かもしれません。私は、トオルのように、こんなにも世の中を敵だと思ったことがないし、陰湿ないじめにもあったことがないので、彼の心の本質を、この物語から見抜ききることが出来ないかも知れません。だけど、私も、誰でもがトオルになる要素を持ちあわせていると思います。核家族化が進み、隣の家には誰が住んでいるのかさえ分からない、分かれようともしない、学歴社会は絶対で級友といえども受験戦争の中では味方でない、こんな世界では、人が信じられなくなって当然だと思う、それなのに、トオルは血のつながった親とさえも心が通じあわない、周囲からも追い込まれ、自らをも自分を追い込んでしまったんだと思います。今の世の中のひずみから生まれたトオルのような少年を、今の世の中は否定します。それが、ますます彼らを増長させる、けれど、肯定してもいけない、誰もがみんな後ろ向きの生き方じゃいけない。私はこの物語がいろいろ複雑な思いをめぐらせました。そして、今の自分は、何をしているんだろう、何を考えているのか、何に満足し、何を求め、どうして生きるのか、そんな事を自分に問いました。

トオルは父親を「あの人」と呼びました。それだけで彼らの淋しい関係が分かります。トオルが教室という戦場から帰ってきたとき、団地の屋上からとびおりて死んでいた「あの人」。トオルが仕事一筋だと思っていた「あの人」も、実はその奥底で悩んでいたのだろうか、それとも「悩む」という行動がおこせるうちは生きていけるのだろうか。トオルは、その死を淡々と受け止めました。私には、それがとても辛く感じました。父の自殺に素直に涙が流せなくなってしまった心。これも今の、どこかゆがんだ社会の産物だとしたら、今後、トオルたちが大人になった時、このゆがみは、もっと大きくなると思います。

その後、トオルはヒカルの存在が今の自分を形作っていたのだと気づきます。ヒカルと別れないと、永久に自分はこのままだ、と悟ります。その思いをヒカルに告げ、トオルの涙と強い雨がヒカルを掻き消す。その涙は、ヒカルとの別れに対してだけでなく、父の死への涙でもある、あつてほしい、と思いました。雨が止もうとするとき、ト

オルは今まできつくあたることしか出来なかった母に、いたわりの言葉をかけます。短く小さく、ではあったが、その言葉の分だけ彼は、前に進んだと思います。

「ピアノシモ」とは、「音を出れるだけ弱くせよ」の意です。それは、闇の中で息を潜めて生きるトオルのこれまでの姿のようにとれます。しかし、父を失い、ヒカルとの決別を自ら選んだ彼は、この「ピアノシモ」の指示には従わないと思います。少しずつ、良い意味で自立して、周囲と共存できる一人の人間になっていこうとすると思います。この作品を通して、今の社会のひずみに負け

ず、またそれをそのまま認めず、自分の道を開いていかねば、と考えさせられました。



奈良高専映像100選決定

高専卒業生は、一般教養が不十分であると、よく批判されます。このような弱点を映像を通して少しでも解消してほしいとの考えに基づいて、この度、図書館委員会では、「映像100選」を定めました。

今までなら見ることのできなかつた古い映画なども、ビデオやLDで、家庭で簡単に見られる時代です。

しかし、学生諸君の映像観賞は、ともすれば、その時々商業宣伝に影響され、一部のイベント化した作品に流されがちです。私たちの心にしみじみと語りかけ、あるいは感動をもって考えさせてくれる新旧の作品に接して教養と情操を豊かなものにしてほしいものです。

積極的に映像100選を観賞することによって今まで人間が生み出してきた映像の最良のものに接することができるでしょう。そして、それは諸君の今後の生活の大きな活力となることを信じています。

1. イントレランス (米, 1916)
2. カリガリ博士 (独, 1920)
3. 吸血鬼ノスフェラトウ (独, 1922)
4. 黄金狂時代 (米, 1925)
5. 街の灯 (米, 1931)
6. チャップリンの独裁者 (米, 1940)
7. 戦艦ポチョムキン (ソ連, 1925)
8. 西部戦線異状なし (米, 1930)
9. 大いなる幻影 (仏, 1937)
10. 望郷 (仏, 1937)
11. オリンピア民族の祭典 (独, 1938)

12. 駅馬車 (米, 1939)
13. 荒野の決闘 (米, 1946)
14. 風とともに去りぬ (米, 1939)
15. ファンタジア (米, 1940)
16. 市民ケーン (米, 1941)
17. カサブランカ (米, 1942)
18. 天井桟敷の人々 (仏, 1945)
19. 第三の男 (英, 1945)
20. 虹をつかむ男 (米, 1947)
21. ハムレット (英, 1948)
22. 自転車泥棒 (伊, 1949)
23. サンセット大通り (米, 1950)
24. 巴里のアメリカ人 (米, 1951)
25. 真昼の決闘 (米, 1952)
26. 禁じられた遊び (仏, 1952)
27. 恐怖の報酬 (仏, 1953)
28. シェーン (米, 1953)
29. ローマの休日 (米, 1953)
30. エデンの東 (米, 1955)
31. アウシュビッツ夜と霧 (仏, 1955)
32. 北北西に進路をとれ (米, 1959)
33. 太陽がいっぱい (仏, 1960)
34. 勝手にしやがれ (仏, 1960)
35. 甘い生活 (伊, 1960)
36. ウェストサイド物語 (米, 1961)
37. サウンド・オブ・ミュージック (米, 1965)
38. アラビアのロレンス (英, 1962)
39. 長距離ランナーの孤独 (英, 1962)
40. 俺たちに明日はない (米, 1967)
41. アポロンの地獄 (伊, 1967)

- | | | | |
|-------------------|----------------|-----------------|-----------|
| 42. 2001年宇宙の旅 | (米・英, 1968) | 74. 二十四の瞳 | (日, 1954) |
| 43. ゴッドファーザー | (米, 1972) | 75. 野菊の如き君なりき | (日, 1955) |
| 44. ミツバチのささやき | (スペイン, 1973) | 76. 真空地帯 | (日, 1952) |
| 45. ロッキー | (米, 1976) | 77. 東京物語 | (日, 1953) |
| 46. 未知との遭遇 | (米, 1977) | 78. 雨月物語 | (日, 1953) |
| 47. E. T. | (米, 1982) | 79. 近松物語 | (日, 1954) |
| 48. ガンジー | (英, 1982) | 80. ゴジラ | (日, 1954) |
| 49. スターウォーズ | (米, 1977) | 81. 幕末太陽伝 | (日, 1957) |
| 50. ファニーとアレクサンデル | (スウェーデン, 1982) | 82. 張込み | (日, 1957) |
| 51. 赤毛のアン | (加・米・西独, 1986) | 83. 宮本武蔵 | (日, 1961) |
| 52. 紅いコーリャン | (中, 1987) | 84. 飢餓海峡 | (日, 1964) |
| 53. ラスト・エンペラー | (伊, 1987) | 85. キューボラのある街 | (日, 1962) |
| 54. ダイハード | (米, 1989) | 86. 東京オリンピック | (日, 1965) |
| 55. レインマン | (米, 1989) | 87. 心中天網島 | (日, 1969) |
| 56. 非情城市 | (台湾, 1989) | 88. 男はつらいよ | (日, 1969) |
| | | 89. 幸福の黄色いハンカチ | (日, 1977) |
| | | 90. 仁義なき戦い | (日, 1973) |
| 57. 雄呂血 | (日, 1925) | 91. 砂の器 | (日, 1974) |
| 58. 赤西蠣太 | (日, 1936) | 92. サンダカン八番娼館望郷 | (日, 1974) |
| 59. 人情紙風船 | (日, 1937) | 93. 新幹線大爆破 | (日, 1975) |
| 60. 土と兵隊 | (日, 1939) | 94. 泥の河 | (日, 1981) |
| 61. 戦ふ兵隊 | (日, 1939) | 95. とりのトトロ | (日, 1988) |
| 62. 無法松の一生 | (日, 1943) | 96. 風のナウシカ | (日, 1984) |
| 63. 原子爆弾の効果—広島・長崎 | (日, 1945) | | |
| 64. 安城家の舞踏会 | (日, 1947) | | |
| 65. 青い山脈 | (日, 1949) | | |
| 66. また逢う日まで | (日, 1950) | | |
| 67. 羅生門 | (日, 1950) | | |
| 68. 生きる | (日, 1952) | | |
| 69. 七人の侍 | (日, 1954) | | |
| 70. 蜘蛛巣城 | (日, 1957) | | |
| 71. 隠し砦の三悪人 | (日, 1958) | | |
| 72. 天国と地獄 | (日, 1963) | | |
| 73. カルメン故郷に帰る | (日, 1951) | | |

参考文献

- 田中純一郎 日本映画発達史
 キネマ旬報 日本映画200
 アメリカ映画200
 ヨーロッパ映画200
 広沢栄 私の昭和映画史
 朝日新聞1992.8.30日曜版

太字は既に図書館に入っています。それ以外も
 順次購入予定です。

'92 読書週間の催しについて—映像文化—



